



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 17 18 19



梅の糸 四編 中

遠 13
841
17



遠人門
841
11

春色梅美婦ふね卷之十一

江戸 爲永春水著

明治三六年
十月十八日
講求

第九二回

そましく身み頭かぶ天王てんわうと申まを存ぞんりり神かみ代よの御おん勢せきひひ猛まうききの神かみゆゆて
素す盃すわい鳥とり尊みことととりり然しかるる人ひと皇みかど五いつ十じゅう六ろく代だい清せい和わ天てん皇みかどの御おん宇うに
播は磨ま石いし園えんよりより山やま城じやう園えん八はち坂さかの郷きやうに遷せん産さんありて本ほん物ぶつ武ぶ勇ゆうの
角かく舟ふね神かみと出でぬれ存ぞんりり最さい古こにに故ゆゑハ清せい和わ天てん皇みかどの真まこと
観かん十八じゅうはち年ねんよりより今いま天てん保ぽう十二じふに年ねんまでまで八はち百ひゃく六むそ十じゅう六むそ年ねんありありれど

系 猶と色より古く入皇十二代景行天皇の四十年に日本武
尊東夷を征伐の時夷退治の大願を素戔嗚尊の
祈りありとて始て東國のあまを宗りありしが宮初なりとの
素戔嗚鳥尊の鎮座すまは御社の武藏國豊嶋郡
忍の池の西北より根津大権現則こまなり実の武運長之
然歎退散癘病除の祈りあり江武のあて根津権現の
勝る神靈のゆへに名ありあ日本武尊の武勇の事
ありしに神ありば素戔雄尊の神功ハヤも多しと森略

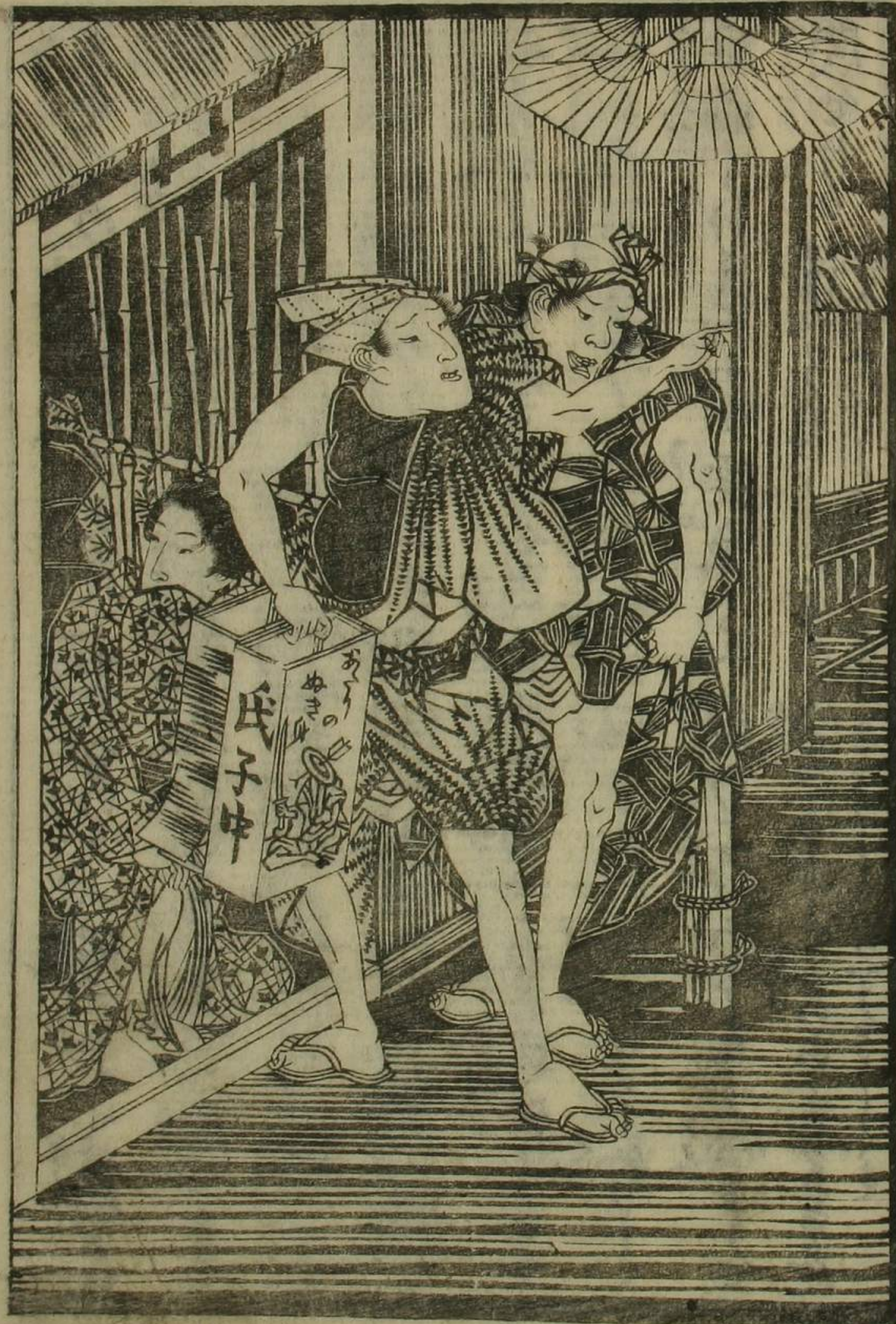
うづべーあふ根津の社ハ千七百三十二年のじろーう在せ
山城國の祇園の社より古きより七百六十餘年の以
亦牛頭天皇と異名を稱し兩部習合の況ありて諸書
ありてありとも神代の遠き昔素戔雄尊の餘りも極
荒く在りしに天照太神の地勘當とけりし日本
國の中住ありとくありしが琉球國までさき入巨且
大王といふ人の家近付宿を乞ふ人も巨且の情を知らぬ
賊主といふ巖くおて首級入るが却て害し存ん計

此第の素齋雄尊も勅當の内身にて勢ひるけまは詮
方なくを行を退き獲民といふ食ひき者の家内より宿を
求めぬハ獲民といふ食ひと人とも甚深き者なれば其を
勞り内宿をいふ一葉の飯を進めたり折第異國より暴疫
鬼の押来るるを其のいハ獲民が家の入口に茅の輪を
造り神法を行ひ遠を除ぬを盟目より一村の人ことごとく
疫病を煩ひ死ふけまはとも獲民の家内ハ疎く疫病を
のがまらう斯く獲民の別且といふ第作せられけり

此後もまこと疫病の流行時ゆへハ獲民お來子孫と
書て門口に張るべ疫病の家内ハ入りぬとと教へ
ぬひといふ実ゆも勇く一き尊の内切らば後まゆく
神方わらふに在ゆ日本國中は素齋雄尊身頭天王
武塔天神もを祭らざる所より別て祭末花の町よりハ行彼
所ゆてその神樂を終造て氏子中を渡り疫病を退り
ぞけるるをり六月の祇園會ハ三才も初りけるるをり
周尔依てあふあるをり再説天王祭りの神樂ハ行禮を仕業

かろくしき所へ周来逃来る一人の狼もきく追来る
三人先なきる一人は又庵丁の研きりたるを右手に引
程後小續き二人の男ハ三四尺をり多棒取持て欠来る
娘ハ善元の四人主一軒下の暗き方へ隠るると善元ハ早
くも推して脊後の路次口へ入里て来る所へ近村三人が
今西行八十八九は多る娘を通りハ仕合せんる玉に娘
今道次をけりけり身をもて七人で行く虎ハ何所の
方へ行やしよ一然きか所へ入り先ハ知らひかひ先の

横町をまがって逃て行く事をもてさくハ行り平ハそのせがせ
まのま虎ハ勝の女が盗入り下言をり欠知り行脊後
見送ると仕事等が娘を隠せ路次ハ入山家多ありて信
切ハトキニ多る危ハ目合所をけりサハまはバサ一人の野良
りびくく兜る双物を持て居るアがらこせ玉コヲ婦さんお前
多分格このごら何でも隠れ悪ひるてもまこの彼奴を
捕まると殺すてもま格を双物を持て来る奴ハ大方
お茶の丈丈ならん一何でもおまら一の西をて追来る



か
条
難
と
退
れ
夜
通
家
に
至
る

取て加るる影の中より引出ぬ六月の光るる関へ
まゝなる一個の美人四辺を見まへり驚く風情れ則
別人きび彼婦多けし居る一糸吉が柳川亭
振捨て尼寺へ初んと途中の雇ひくる加るる者ども
か男のもよぶる悪人老練余の初路を遠てかる
舟へ連れまゝありし一もくあふる中の宿をでるまひ
ねく虎へおまゝさ本街及をうらぐ初とお茶の家
内うらぐ進人がをらふ一は方の胸は兼用も悪ひうら

田舎及を横筋遠くは移る舟へ連れまゝこのサ
ま今我アは家へ止宿と極みせ人五匹の明である
宅より諸道具もな一火の氣もな一不自由せり
ねぐま代りある隣家へ遠く往來の人へ通下は言
はるを一ても空人のな一初を初移せりと遠く入
のへ

ト勝もる戲言を仕まゝ三人ころとてお茶をまゝ
いと古びる草花家の内へ引入る燈火を照く兼て

居る縁がゆきつとそけいなるゆきつとそけいなる
ゆきつとそけいなるゆきつとそけいなる
ゆきつとそけいなるゆきつとそけいなる
覚悟して自由なるが縁下ゆきつとそけいなる
退れづこのまゝお茶の箱を詮方まゝ見へけり

初て三人の悪人あり飽まを酒食を尽しけれハ虎
八ハお茶の膝を枕しき膝の二人も酒蔵様お倒
まで正体さうりしお茶ハ一生食ふ神傳を行す

頼てき家と逃出—東西南北の當所もまぐ右
よ左と欠きりやまぐふ町家へおそ彼天王の大方
燈を仕奉場所へ逃れりしよりけ上貞飯と仕奉
等ふをりけまぐ茶場の人々ハ齒をうるまぐ

ハイヤハヤとさやアはアとんご驚ししやアとまぐが実
止まらば今退欠て来さ奴等ア自引どナアト言
へ友達も一同のハアアとまぐが実
園て居るこのごと彼奴等も奴らも倒してあり

きせてきるものヲ脊後を遊々でも多捕る
るひ出来りやう。ハイヤあー盗人極まりのこと
うら今ふまこは所へもつて返して来りもかれまひ
うらアアく頭の宅へでも連れて行て止宿せやうが
宜うらふト

ましも実意の壮年負貸俄み人々が頼めく
お条と今抱して主町内の改ざらうる人の家
あぞ伴ひける

第廿二回

お六更にも涼風小働き山女と夏の空田舎もまじく
銀行自然と妹へ近くうる冷気と僕も時刻うらふ
お条を頭の家へ伴ひあきあきのを同て立出る二十
二三才の婀娜うる女は家の娘めて夕暮お稲とのお条と
顔を見合せておねアヤ条若きんアアアお稲を成さ
サアくお上りなうアヤく小稲さん室にお久うらうら
お久子エト互ふ挨拶をまるとお着ては家の主市幸き勝

市へ早お稲の友達ら ねへて和哥町の居る時へ姉妹の
梅よ着てしんじりま 市へア然う丈どろ 稻更のりこ遠ま
あふ奥へ行て娘と二人でまきくア 体も成定めて
勞まもあらふサアくくうまらむる人 行なせ人 一ア有かふ
ねへてサまあまきくあようふ私まうりて 誰人も外へ
居まひアトま行ふけまふ柔の方 市郎まあハ子分の
若花の向ひ 市へサアく餘りあがらけるうらほとも早く
休ま宣らふ残りの片行のめハ明日のまらるが程でま

る遠でもおまあるを悪のうらハナニ室甲五錢片付て仕
まひやしと残つこの人懐のりくむりぶらう老てののりふ
片付て仕まひやせうトの折らる表の方うてわら物強
かしく若花の声をて 一アヤヤく逃まらへく頭の室へ引ま
込がりの太三奴ご 一アヤヤく向又とらま落まらぬとわけ
ねへて長者書てうま倒せくト大勢さつぐを同付て
お茶を送り入らる若花も 湯物くを引提く本方の
方へ大出しゆバ市希まあハ終まらるも 表の戸をメ

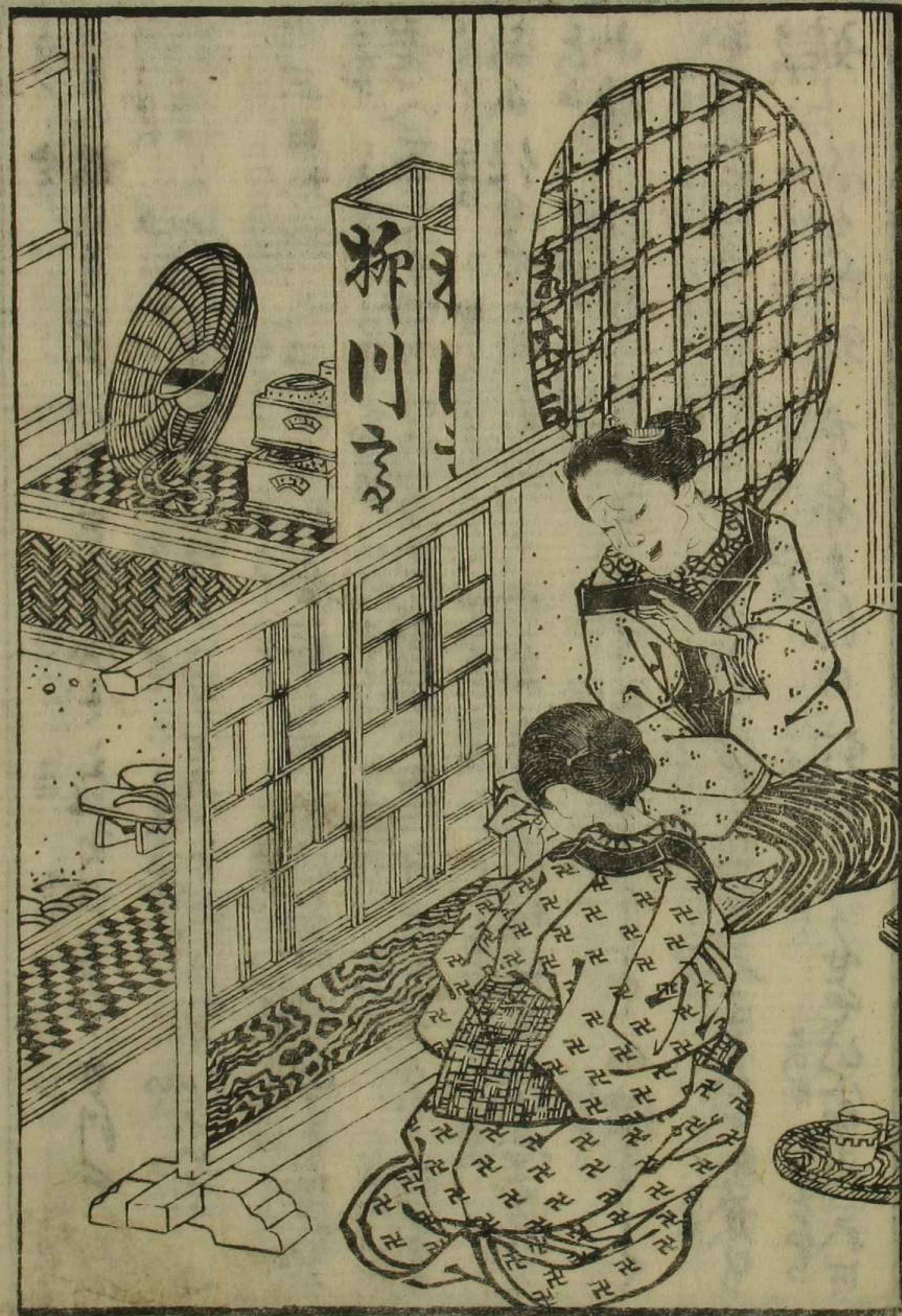
支度と一腰と帯一市一お稲やけ身が帰るまで
縫をうけて盡て戸を明らぬヨト言降ふ一七市
宜究の場所へ欠出し行

斯て市部ま清が欠分て見まが
終虎終熊終平の三人が
見失ひまゝ欠行一が
為虎のお条を隠せ一
まゝ一りりおまが弱まを助ける
壯年の元氣も操

条の元氣元來非道の悪者を憎く復さわり
ける野へ身の程おぬ虎の強よ
まゝ終平も平多る奴めぬべ
客の只中へ飛を火入出同然
疫病神を掃ひ清める牛頭天王の神徳
ハヤイハ盗人お女と白引損多
つてをるく口呆まこ畜生
縄で縛るが袈面創が
殺せくト之勢が集

つとて又物をお落し頼て三人の者を縛めてぐらぐら
巻みせしる市郎も勝ハ壮年等分ちあて強く
おせださまども願ふ公をおまよがる曲者のまを
後々の見とらしあもろるべしとて文江野人折人を
久の腰元の頭の花をのめて三人とまの首を切て後々の
悪人を懲らしめぬぞ難をけし遠く名併目殺もるて
後のゆくと案しとて一借もす夜の明けまぶお橋お案す
食ひゆるとを進ちしと父の市郎も勝ハ終夜同く由

ゆとお案の身の上と安く誇り笑せしる市郎も勝ハ
あまを聞て笑ひまら市つらむと女つどもあまの
飲りゑの秩ひ了るを付こののどつら誰人も六借言と
けでもあひのの自角むらり落度度のねみ三人の中で一人
角と引て尾のあつあんごといふ不存なるりかひこの多
とてアを箱の美羅顔をお道奴一人歩ゆとまら
ら肥衣のねるむぶるの目小逢ごらふとやるのらお結
衆中ふあいの死人が性来小居とまぶとてお家へ強しと



影し人の身を遠く帰りの人より疑き悲し
尾寺へ移りて遠く住せしまはも海江へまど沈し
又ハ途中のそる夏の災縁を受けて身と苦も危き
ふみ逢て不居くと案が細りど如何かとも怪方な
けまは両母の神み祈り男者と頼み種くまきと便
きく途方とくふむりりり然る折川亭の隣家の
者も隠しとまきど園傳て見舞み来る各々実
意の世話をしと彼是と尋ねか如在いりりかお茶が

家をせしより三日目の日中と夕立雨の降て往來の
途切きとるお節桑見世の戸を半かあらしとあを
遠入る隣家の内を一人の女を伴ひてお茶の母の
嘆きまも彼女を異之通しけまは長衣の円も言合
せりま表と裏とより二三人入来り母より人小核投し各
ひそめき寄合の一人が立て茶碗の水を汲来る盆の
上ふ載てましおをを母の清見り隣家の内をが連來
り女の前へ備へり頓て水をも向ふふ及けり見え

降巫のりこといふものありて祈いのちる折あの人の迷まよひを會あはゆる野
乃なるがら又また主ま理りるぬ女子おんな達の人情にんじやうるん儲たくわも降
巫のりこの生なま口くちと水みづ向むかひまを定さだめりの言こと出いても縁ゆかり内うち業わざく
降巫のりこ不ふ同どうとのと變かはりまする長家ながやの内うち女にさぬお可よ骨こ
といふが勝かちさまももアアアアお茶ちやさん之これ工たくら遠とほひのひ之
女おんなアアササキキ極ごくみ疑うたがひを言いふととお茶ちやさんららららららの野
み居おるりる支しををお圓まるるる。夢ゆめのの。アア子こお茶ちやさんお茶
アア母ははさんんググはは極ごくみみほほのの。七しち苦く勞らうみみししお在あるるのの

何故なにが便べんりるをを成なりてて多おほひひ工たくら七しち遺書いしよと遠とほ行ゆきて尼寺にじ
アア母ははさんんググはは極ごくみみほほのの。七しち苦く勞らうみみししお在あるるのの
さも悲かなししげげるる声こゑ音ねめめ生なま口くちもも裏うらままりり
今いまさら後悔こうかいをを仕しままへへググアア家いへををおおりり思おもひひがが多おほひ
人ひと達の取と囲とりままをを幾世いくせいの秘ひ義ぎをを為なすすひひアア母ははさん
人の案あんどどをを下くだ苦く勞らうよりより私わがが母ははさんんをを案あんどどににおおくく
辛苦しんくの悲かなししままののアアお極ごくめめままるるつつもも眼まなこもも
人の隣となりるる母ははさんんのの側たがひををおおりり不ふ孝こうのの咎とがもも定さだめめり

何卒お茶がつづがらゝ家内へ帰る極よまる除き
 きては只よと降巫小頼其外種々見せりて
 片時もあつてひらひらうらうらと鳴呼世の中の
 親公子故小味び賢きも思ふあつてと哀れまう

春色梅美婦衿巻之十一



揚太真遺傳 精製桐の箱入
處女香
 百二十文

ともくお茶の葉の春朝を新の如きそて男女小限り人新の巻とらるゝく
 してまきとあつてもお茶の葉の如きとあつて
 ちりちりの葉世間ふ多く白粉洗粉化粧水と油茶と衣巻とて
 皆とてく新の葉にさるたのむと物能事小茶とてあつてもその書付の
 半分も物能は倍々けい直板と油屋とても久しあつてはとてとて
 何中へさるるんがさるるあつてたれ小茶茶さるる茶とてとれり
 判ひあつてもあつて物能のねまら茶さるる一とて判ひあつては新の

所弘賣

色自然と搦のどく有り二日用ひるが如く種不荒産の机目も
羽二重の縁のどく死手漢うとするのどく比。ゆれば。そばまで。後物
の次。毛のねおしゆ添さく海うとするのどく。佳合。物死て教と
洗ひこの玉梳多紙さう過るのどく。白粉と付る指さるるもさくど
自然素良の白くうさく死指さるれ始方いら余不及年産は方が
用ひても目にさびと美くする製法ゆ色法難ひさく用ひたされ
真の美人とさるる人

為永春水精削

髪髪の髪と髪の髪 妙妙業業 初初みみぬぬるる玉玉

この玉の髪と髪を洗つたの
あひひさうもうらとくさる
さうのう有 代二十六支

書物并繪入讀本所

江戸京橋跡左二門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

